確かな学びと豊かな心･健やかな体をはぐくむ　**学校評価書**

（様式⑦　小学校・中学校・高等学校）

**堺市立日置荘小学校**

**中学校区におけるめざす子ども像**

**自らの課題に気づき、学び続ける子**

**校長　稲葉　淳郎**

**令和５年度　重点目標**

**○自分たちで整えた美しい学校環境の中で、学力の向上、豊かな心の育成、丈夫で健康な体力づくりを行う。**

**○個別最適な学びと協働的な学びをバランスよく充実させることにより、一人ひとりの子どもの成長を保障する教育を実現し、教員も授業力や生徒指導力を向上させる。**

**「豊かな心・健やかな体」の現状**

**本校児童は体力・筋力は全国平均を上回るが、瞬発力や柔軟性に課題が見られる。また、運動が好きだと感じている児童の割合は全国平均を下回るが、一週間あたりの運動量は多い。このことから、運動はしているが、自ら進んで楽しいと感じて運動している児童は限られていると言える。**

**「確かな学び」の現状**

**令和４年度の全国学力学習状況調査では、算数・国語とも堺市・全国平均を上回るなど、これまでの成果がみられる。**

**しかし、学びへの興味・関心については高いとは言えず、自ら進んで学ぶことや、学んだ結果として生まれる社会的参画力に課題があると考えられる。**

**こ**

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 大項目 | 中項目 | 具体目標 | 具体的な取組  ●重点とする取組、★中学校区での取組） | 判断基準  (評価のものさし) | 評価方法 | 評価時期 | 進捗確認  （～11月） | | 達成状況（年度末） | | | |
| 自己評価 | | 学校関係者評価 | |
| 確かな学び | 学力の向上　授業改善 | UDの考え方をベースに、タブレットも効果的に活用しながら、基礎学力を身に付けるとともに、子どもが主体的に学ぶ中で、知識技能の獲得だけにとどまらない総合的な学力の向上をめざす。  授業の中でも子どもの活躍の場を設定し「居場所と出番」を確保する。 | 〇児童用タブレットの効果的な活用  学習での活用法を研究し、研修等を実施ながら効果的に実践をめざす。 | ・タブレットの活用内容と新し  　い使い方の開発  ・タブレット使用法の交流回数 | 学級、学年での交流とチェック | 11月と2月 | Ｂ | 本年度からICT教育推進委員を新設し，効果的なタブレットの活用，教師のスキル向上に努めている。 | Ａ | ICT推進委員の新設もあり，ICT機器の使用頻度については，堺市の平均を上回る結果となるなど成果が見られている。 | Ａ | ＩＣＴの推進による成果の向上が見られることは，今後の学習に良いことだと思う。ただタブレットは軽いものにしてほしい |
| 〇子ども自ら学ぶ機会の設定  自主学習や総合的な学習などの中で子ども自身が、学ぶ内容や順番を決め、学び方や表現方法を選択できる機会を設定することで、主体的に学ぶ子どもの育成をめざす。 | ・交流方法の研究と実施頻度 | 校内研修を中心とした交流とチェック | 適宜 | Ｂ | 自主学習の学年掲示や漢字ノートの「けテぶれ」に学校全体として取り組んでいる。 | Ｂ | 堺市のアンケートにおいて本校の児童の約８割が「自分で学ぶことや順番を決めている」という設問に肯定的な回答をするなど一定の成果が見られている。 | Ｂ | 自主的に学習するのは良いが，個人差が大きいように思う。また，学年，学級で宿題の |
| ●★楽しいと思える授業づくり  「学ぶって楽しい!やってみたい、考えてみたい、人の考えを知りたい」など、子どもたちが主体的に学ぶ授業づくりをめざす。  　その中で、単元を通してつけたい力やゴール、一時間の振り返りを設定し、出口から授業づくりを行うようにする。 | ・子どもが主体的に学びたくなる指導方法の開発数  ・１時間の中で、出口を意識して展開した授業数  ・出口から設定した単元の数  ・「居場所と出番」の設定頻度 | 学級、学年での交流とチェックと学習後の感想などによる子どもの変容 | 11月と2月 | Ａ | １１月までに４回の研究授業を行い，思考力の活性化について研修を重ねている。また，当日の授業だけではなく，事前検討会も行っている。 | Ａ | 年間で６本の研究授業を行い，子どもが主体的に学び，思考力を活性化させるしかけづくりを行うことができた。研究授業の際も事前検討会を行うことで，出口から考える授業づくりが少しずつ定着してきつつある。 | Ａ | タブレット端末も使用しながら時代にあっている学習を進めていると感じている。その分，よりリアルなコミュニケーションが重要になってきている。それらのバランスが重要なのではないか。 |
| 豊かな心･健やかな体 | 自尊感情の育成 | 子どものよさを引き出す学習を構成し、自己肯定感を育成するとともに、他者理解を行い、いじめのない信頼される人間関係づくりを構築する。 | 〇挨拶指導の徹底  　自らの行動を律する取組の現れとしての挨拶指導を徹底させる。  　教師の指導と子ども自らの発案による児童会や学年学級独自の子どもが主体となった取組の両輪で挨拶指導を推進する。 | ・あいさつの大切さについての指導の取組の充実  ・児童会等による新しい発想の取組とその回数 | 委員会活動の実施状況  学級での実態調査  アンケート | 11月と2月 | Ｃ | 教職員が挨拶したら返すことができるが，自分から挨拶することは少ない。代表員会の児童たちの挨拶運動をすることで挨拶の大切さを促している。 | Ｃ | 教師から積極的に児童に挨拶していくことを意識させたい。  挨拶の大切さを挨拶運動やクラスでも指導をしていく必要がある。 | Ｃ | あいさつに関しては毎年の課題となっている。登校指導中に「ありがとうございます」「行ってきます」と言ってくれる子もいる。これからも，地域でも声をかけていく。 |
| ●居心地の良い集団作り  　誰一人として阻害されることのない芯のすわった集団作りを行う。その方法として子どもが自己存在感を感じられるような集団作りをめざす過程で、アセスも活用し個々の子どもへの支援を積極的に行う。 | ・アセスやいじめアンケートの実施により、継続的な支援を行う。  ・協働的な学びの一要素として集団作りも位置づけて積極的に推進する。 | アセスやいじめアンケートによる点検と交流  協働的な集団作りの実施回数 | いじめアンケートともに毎学期実施  (年3回) | Ｂ | どの子も安心して過ごせる環境にするためには，どういう手立てが有効かなど考えていく必要がある。  適切な行動をしている子どもへの評価のあり方にも工夫が必要である。 | Ｂ | 児童一人ひとりの実態など把握することができている。しかし，全体に情報共有を行う課題がある。全体で取り組む方法を考える必要がある。 | Ｂ | まずは家庭を基本とした集団作りが大事である。そのうえで，学校で個に応じた対応をしていただければと思う。 |
| 体力向上 | 身体を動かすことが好きになるとともに、これからの時代を生き抜く体力を養う。 | 〇生涯にわたる心身の健康・増進のため身体を動かすことが好きになる取組の推進  　体育の授業を中心とした体力づくりをより積極的に取り組む。 | ・日置荘っ子体操、なわとび、サーキット、運動領域別トレーニングの継続的実施 | がんばりカード、振り返りカード  学校アンケート | 11月と2月 | Ｂ | 本年度は６月から体育館が工事のために使えなかった。暑さも１０月くらいまで厳しかったため，運動場が使えなかった。そんな環境でしたが，体育の授業を工夫しながら，水泳も１０月まで行うことで，児童の体力づくりに取り組んでいる。 | Ｂ | １１月頃から運動場も４分の３の広さになり，ますます運動がしにくくなった。そんな中でも授業を工夫しながら，体力向上に取り組んだ。休み時間にはなわとびチャレンジにも取り組んだ。 | Ｂ | 子どもの体力低下は深刻に受けて止めている。なわとびや持久走等で体力づくりに取り組んでほしいと願っている。スポーツテストのデータを生かした取り組みも進めてほしい。屋内プールが使用できてよかった。 |
| 教育環境整備 | 学習環境づくり | 一人ひとりが自らを伸ばすことができるよう、落ち着いた教育環境を確保する。 | 〇割れ窓理論に基づいた清掃指導の継続  　清掃のやり方を指導した上で、一人ひとりが自覚をもって清掃活動を行い、静謐な学習環境につながる基盤をつくる。 | ・役割分担等の明確度合と徹底度  ・清掃について、子どもの振り返りで充実度の分析 | 子どもの振り返り  委員会活動 | 11月と2月 | Ｃ | 振り返りシートの項目を意識して掃除に取り組むことができている。しかし，クラスによってマイ箒，マイ雑巾制が定着できていないところもあった。 | Ｃ | 一人ひとりの子どもが掃除をすることの大切さ，意義を見出すことが必要であり，指導も進めていきたい。 | Ｃ | そうじの概念や道具の使い方を知っておくことが大事。生きていくために必要なことを知っておくことが重要。 |
| 人権教育の推進 | 他者理解と  自尊感情の醸成 | 障害者理解教育を軸とした人権教育を推進する。 | ●障害者理解教育を軸とした自尊感情の醸成につながる人権教育の推進  人権教育には、他者理解と自己認識が不可欠であり、障害者理解教育を軸にしながらも、子どもの実態に応じた人権教育を積極的に推進する。 | ・実施教材数や確保した実施時間数  ・子どもの感想などによる変容 | 学校全体や各学年での振り返り | 毎学期の計画と検証  及び  11月と2月 | Ｂ | 学校全体で他者理解につながる取り組みを共有していきたい。子どもの指導の前に，教員の意識を高める必要があるが，大前提として子ども理解が必要。それに基づいた人権教育をめざしたい。 | Ｂ | 障害や特性を持つ子どもだけでなく，一人ひとりの自尊感情を育てる教育を継続して取り組む必要がある。 | Ｂ | さまざま障害を認識していくことは大人でも難しいと思うことがある。子どものうちから少しでも障害の理解を進めておくことも必要。 |

**校長より（年度末）**

**体育館が使えない中でも教職員が創意工夫して教育活動を進めていくことができた。しかしながら，あいさつの面では個人差があるものの課題を抱えている現状にある。次年度以降，意識的かつ積極的に子どもたちに声をかけ，あいさつがあふれる学校になるよう，家庭・地域とも連携をさらに深めていきたい。**

**学校関係者評価者から（年度末）　知育・徳育・体育を進めながら，学校としてどんどん挑戦していってほしい。**